

## 「靈性」——その創造論的理解の試み\*

橋本昭夫

### I. 精神の理解をめぐって

精神をめぐっての教会的・神学的論議において、「靈性」はキリスト教的信仰においてのみ語りうるとするような印象を受けることがある。その場合、福音により聖靈なる神のお働きをとおして新たにされた人間のものとしての靈性が論議される。靈性をいわば「贖罪後」のこととして語られているように思われる所以である。むろんこのように靈性（の深まり、充実など）を贖罪の結果として語ることは間違っていない。いやむしろ教会において、それ自身として語り、それを信仰者のあり方の基本的方向として示されるべきであろう。しかし、靈性を広く、普遍的に人間の基本的な現実として考えるとき——とりわけ、それを宣教論的に・弁証学的に考えるとき、その論議を、キリスト教信仰に限定することの根拠づけなしに進めるとき、教会の「外」にある現実、「非キリスト教的靈性」を除外することになりはしないであろうか。教会の「外」にも、靈性と呼ばねばならない人間的現実を認めねばならないのではないか。すでに禅者・鈴木大拙は、靈性は普遍的なものであるという

意味のことを、早くに、その著『日本的精神』において述べているとおりである。もし人間が神の被造物であり、その特異性は人間の「万物の靈長」的側面に求められるならば、キリスト教神学において、その端的な現れと思われる「靈性」を——それがどのように理解されるにせよ——、当然のことながら、まず広く創造論的に論じられねばならないのではないか。本小論は、靈性を贖罪論的に論じることの妥当性を認めながらも、靈性論議を創造論も含めた神学全体の中に正しく位置づけることによって、より事柄に則して靈性を論議できるのではないかとの問題意識から進められる。

靈性という概念が用いられるとき、それはさまざまに形容され、特定化される。すでに「日本的精神」をその例として挙げた。それと類比的に、ユダヤ教的靈性、イスラムの靈性、仏教的靈性、そして「外部」の論議においては「キリスト教的靈性」も加えられるであろう。またキリスト教靈性に関して言えば、カトリック的靈性（そこにはまた修道院的靈性なども含まれよう）、プロテstant的靈性とも言われ、さらに細分化することも可能である。このようにさまざまに形容されうる概念を、包括的な上位概念というように呼ぶことが可能である。さまざまに展開されている「靈性」という概念は、すぐれて形式的な概念であるということが理解される。つまり、それはすでに何かによって内実が規定された概念ではなく、その中にさまざまな事柄を容れうる「風呂敷」的概念になっているということである。そして靈性とは、人間の内面から外面に現れる意味探求、被造者としての基本的な傾向のことである。そして、それがどのようなものと理解されるかは、その具体的な内実の規定を受ける過程のいかんによるということになる。したがって、靈性を論じるときに、すでに内実規定を受けた靈性理解を前提とするとき、他の靈性理解を排除することになろう。そして、もし神学において「贖罪後」のこととしてのみ靈性が論じられるとすれば、それは教会の「外」の靈性についての視野を失うことになりはしないであろうか。そして、このことは、また、教会における靈性についての関心の方向を狭隘化し、歪めてしまうことになりはしないかという恐れが生じる。

諸宗教の間に、さまざまな類似性が認められ、それゆえに、たとえばキリスト教が他の信仰的伝統を換骨奪胎して自家薬籠中のものとして（いわゆる

\* 本来ならば論旨を明確にするための注、また文献なども添付すべきであるが、口頭発表の延長として受けとめてください、不備をご海容くだされば幸いである。

「洗礼を授けて」) 用いることが可能というのも、類似性ないしは連續性があるって初めて可能になることである。このように諸宗教間に類似性のあるという事実は、これを神の創造という神学的範疇で、あるいは一般啓示の領域で考えねばならないということを私たちに示唆している。その意味で、靈性を論議するとき、このような創造論的出発点から、贖罪において回復される靈性というものを考えねばならないと主張し得るのである。人間について考えるとき、むろん、私たちはキリスト者だけを人間と考えるわけではない。そして、生きとし生ける人間が、神の似像に創造された存在であるとするとき、人間はすべてに先立って、すでに靈的な存在であり、したがって靈性は、人間の全体そのものと同様、創造の次元においてまず考えるべきことが求められる。祝福のうちに創造された人間がまずあり、墮落のあと、その人間が贖われねばならぬとするなら、創造を前提にしてはじめて、贖われ・回復された人間の靈性について語ることが必要となるのである。

むろん教会において、あるいは神学において、キリスト教信仰に固有の靈性について語ることは、場違いでも必要でもない。すでに多くのキリスト教信仰固有の靈性について語られ、それが妥当であり必要であると認められていることからも明らかである。ただその際に求められているのは、靈性論議の方向の認識である。教会においては、キリスト者の実存における聖化の過程の一面として靈性の深まりが探求され求められることは当然のことであり、必要なことである。しかし、それでいてなお求められるのは、そのような靈性探求の立っている、より広い、靈性一般ともいるべき領域が存在するという認識である。その特定の靈性理解とその基盤となっている靈性一般との間についての認識が欠如するとき、すでに指摘したように、キリスト者の靈性理解も狭隘なものになる危険性が大きくなると言わねばならないであろう。

## II. 精的存在である人間と罪の現実

「鹿が谷川を慕いあえぐようにわが魂もあなたを慕いあえぐ」(詩42:1)といにしえの信仰者は歌った。主なる神への渴望、それは主のみ名を知らざ

れたイスラエルの信仰者の深い心の表明である。しかし、このような超越者、永遠者に向かう心の奥底の渴きは、選びの民に限定されず、人間にとって普遍的である。人間は目で見、耳で聞き、肌に感じる諸現象の奥に、さらに根源的・本來的とも言うべき「何か」があると直感し、おりに触れてそのことを求める。その根源的・本來的なものがなんであるかは、往々にして匿名的であり、宗教・信仰についての「識者」の間にあっては、「分け登る麓の道は多けれど同じ高嶺の月を見るかな」的に、普遍的な超越者——つまり具体的な諸宗教がそれぞれ、それをどのように名状するにせよ、究極的には普遍的な超越者——を目指すのであり、触れようとするのだ、とされるのが常である。これは恐らく「下からの」、人間の宗教的、形而上学的さらには審美的な諸経験から結論づけられた観点であろう。私たちキリスト教神学に身をおき、その営みをする者にとっては、そのような観点を否定するのが一般的である。しかし、もうひとつの視点からそのような「言い草」を吟味するとき、「分け登る麓の……」も、神の「創造的痕跡」("vestigia creationis") の現れであり、一般啓示に基づいていると神学的に言いうるのではないか。アテネの市民が「知らずに何んでいる」(使徒17:23)様子を見て、使徒パウロは、天地の創造者なる神のみ名を教えた。たしかに人間は、現象界あるいは自己の身体的・被造的存在固有の制限を超えて、永遠なるものを求める存在である(「神は人の心に永遠を思う思いを授けられた」伝道3:11——ここで用いられているのは、定冠詞のついた 'olam であるが、ここで言われている「永遠」はいわゆるギリシャ的「静的」な永遠ではなく、「すべての時代に対する神の支配とそれを意のままに処理する権能とを意味する」のであり、ユダヤ教においては人間の時間性に対して神の永遠性を言うのに用いられ、やがて「永遠は神と同意語となり、また彼岸の世界の属性となつた」と説明されている〔教文館版『聖書大事典』—「永遠」の項参照〕)。そしてこのような「永遠なるものを求める」衝動を、靈性のもっとも基本的な意味であるとすることが要請されているように思われる。

人間は自己の存在の意味を求めずにはおれない。「意味などない」とする立場もあるだろうが、それはたとえて言えば、あるはずのものを、それを得られないばかりにないと言い聞かせる(あるいは主張する)イソップ寓話の「すつ

ぱい葡萄」と大きく変わらないであろう。そして、意味を求めずにはおれないこの衝動に、人間の靈性のもっとも端的な現れがあると言つてよいであろう。自己の存在の意味を求めるという基本的衝動は、人間のすべてのふるまい——日常的なものから高度に宗教的・芸術的なものにいたるまで——に浸透している。その昔、「蛮カラ」いうものがあったが、それに類する現代の若者の、一見、反社会的行動すらも、けっして無意味になされているのではなく、なんらかの永遠を求めての衝動であると理解することが可能である。しかし靈的存在としての人間、つまり自己の存在の永遠の意味を求めずにはおれない存在としての人間は、その罪の現実ゆえに、靈性の発現様相においても、いわばプラス・マイナスに大きく振幅する。それは天使的にもなり、サタン的にも——ときには筆舌を絶するおぞましさにも——なる。人間は他の動物に見られない利他性、犠牲的な愛の行為をなす。しかし他方、想像を絶する残虐行為にも走る存在である。人間のこの両極端への振幅はいかに理解すべきであろうか。また人間をそうあらしめている共通の根柢とは何であろうか。人間は利他的行為において存在の充実を味わう。しかしその逆の所作もまた、マイナスの方向に倒錯したものではあるが自己の存在の充実をはかろうとする企てである。それらは、まさに人間の靈性そのもののしからしむるところと言えないであろうか。人間が、広義における靈的存在であるからこそ、善もなし悪もなす（他の生物の行動にはもとより善悪はなく、自己保存の本能だけで動いているのであり、むろん人間がするような意味での残虐な行為などもない）。

このように、靈性を創造論的な出発点から理解し、そして人間の罪ゆえにその本来の内実が失われ、形式的な事態（いわば「容器」）となってしまっている事態から理解するとき、それは人間存在全体について言われるようになる。つまり創造的祝福の痕跡と罪の力の浸透という二重性を帯びていることである。罪の支配のもとにある現実では、靈性は、それ自体において、ポジティブにもなりネガティブにもなり、また多くの場合その両者が混在した形をとるということは当然のこととなろう。したがって靈性がそのままで罪とは無縁なアリティとしてとらえることは誤りである。すでに述べたように、人間の靈性が、靈性であるゆえに破壊的な方向へも展開されうるからである。

むろんこれは、教会の信仰の「外に」限つたことではない。教会史において幾多の信仰的逸脱があったとすれば、それはとりもなおさず、教会内における靈性の深まりの求めなどにおいても、聖書的信仰からすれば是認しがたく、また場合によって神を操作しようとする方向に展開する可能性さえあることを意味する。教会において神学的にも実践的にも靈性を論じるにあたってこのような二重性を念頭においておく必要があろう。ちなみにであるがこのように靈性をとらえ、また具体的な靈性形成ということになると、それぞれの教派の神学的伝統が決定的な決定要素となるであろうことも予想される。つまり異なる教派においては（そしてさらに言えば諸宗教間において）異なる靈性形成があり、それのはずめぐっては神学的対話の対象となる。

人間は神の被造物であるが、「ただ少しく神より低く造」られ「栄えと誉れをこうむらせ」（詩 8:5）られた存在である。神学的に言うならば、人間の特異性は、ここにある。その人間は、「永遠を思う思い」を与えられたがゆえに、それを求めずにはおれない存在である。そのような特異な位置を与えられた人間の神へと向かう根源的衝動を、私たちは、重ねて、人間の靈性として理解する。それは神との靈的な交わりの規定であり、神が、被造物としての人間に与えられた根源的祝福の基本的な相である。それゆえに、神ご自身の麗しさに似せられて麗しく、深く、高く、また広く展開する可能性をもつ。しかし、そのような祝福を受けつつも、罪の現実ゆえに、それは祝福のマイナスの対極にと展開しているのが人間実存の現状である。しかし、人間は罪の現実のもとにあるとは言え、創造の祝福は人間の靈性においてまったく消去されてはいない。現実における人間靈性の展開は二義的ではあっても、なお創造の祝福の痕跡が残されている。それを普遍的に観察することが可能である。しかし言うまでもなく、創造の痕跡として現れるそのような祝福は断片的であり二義的であることを免れない。そしてついには幻滅をさえもたらすものである。それゆえにこそ、人間は贖われねばならず、その靈性も贖われねばならない定めのもとにあると主張しうるのである。

贖われた靈性、それはまた福音的靈性とも言えようが、それは創造のときに神によって与えられた原初的靈性の回復となる。それは被造物であることを喜び、喜んでそれにとどまり、神の「トーラー」（「教えの言葉」）の示す

ところに向けて実現される人間本来の創造論的規定の実現である。そしてそれは、ただ人間の内面にとどまるものではなく、神の創造のもとにある世界の、見えるもの・見えざるものすべてに関する全人的靈性と言えよう。

### III. 創造論的規定としての靈性

上述においてすでに靈性を創造論的範疇において理解すべきことを論じてきたが、いまあらためて、もう一つの視点からその方向で展開してみたい。靈性が「～の靈性」というようにさまざまな領域規定を受ける概念であるということを見ると、靈性はなんらかの触発を得て現実化する、具体化する、それ自体はいまだ形をとっていない可能的なものであり、それと同時に、ある定められた方向へと現実化されることを求めているエネルギーを秘めたものではないかと予想しうる。つまり靈性とは、ある方向へと現実化されねばならない定めであり、エネルギーであるという理解である。そして、とりあえず、その方向を言うとすれば、宗教的方向であり、倫理的方向であり、(芸術も含めての)文化・技術の領域における創造作業的方向というようになるであろうか。この観察がもし正しいとすれば、靈性とは基本的に多次元に展開する包括的な人間論的リアリティであると言える。そこで、次に出て来るのは、そのような包括的かつ広汎にわたる人間論的リアリティの由来をどこに求めるべきかという問い合わせである。すでに示唆したように、靈性の人間的普遍性、包括性、またその多様な方向へと現実化する可能態であることを考えると、その広汎・多次元性ゆえに創造論的人間規定一般が念頭にのぼってくる。靈性とは、人間の、神の被造物としての内面的本質であり、かつ定められた運動の方向をもち、多様に・多次元的に展開する可能性を秘め、つねにその現実化・具体化を求める内的衝動であるというように言えようか。

創世記1～2章に二つの「版」の創造記事がある。一つはいわゆるE(エロヒーム)典に、もう一つはJ(ヤーヴェ)典からのものであると言われたりする。この二つの「版」の創造記事は、それぞれに靈性の理解にきわめて重要な、かつ含蓄深い概念を提示している。E典においては「神の像」("imago Dei")であり、またJ典における「命の息の注入」("inspiratio spiraculi vitae")

である。創世記2:7によれば、「主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きた者となった」のである。このテキストを精細にどう釈義するかは他日に譲らねばならないが、それを待たずともその意味する「太い」ところは明白であろう。つまり「土のちり」からなる人間——つまり「もの」であり「からだ」である人間に、神は「いのち」の息を吹き込まれ、人は「生きる者」(共同訳)となった。

言うまでもなく、ここで「いのち」と言われ、「生きる者」と記されているのは、ただ単に「生物」として存在するようになったという意味に限定されない。旧・新約において「いのち」も「生きる」も、形式的概念ではなく、すでに固有の意味をもつ内実的・内実概念であり、概念の絶対的用法ともいいうべき用いられ方をしている。つまり、「いのち」とは本来的な内実を内に秘めた概念であり、また「生きる」も同様で、聖書においては「意味あるいはのち」というのは「丸い円」というのに似て冗語的と言わねばならないものである。

人間は神に創造され、「鼻にいのちの息〔神の息!〕が吹き込まれ、生きる者となった」とは、それはまた広義に「神に向かう存在」として「生きる者」となったということだと言わねばならない。神は人間にとって「生ける水の源」(エレミヤ2:14)とも言われているからである。そしてこの「生きる」ということは、すでに述べたように、人間にとって生物学的な生命に限定されず、むしろそれを前提とし・媒介しながらも、それを超越してなされるいとなみであると言うことこそ、人間にとって本来的な意味での生きるということなのである。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口より出る一つ一つの言葉によって生きる」(マタイ4:4)との主イエスの言葉は、神に生きることこそ「生きる」ということであって、聖書におけるその本来的な意味はそこにあるということを示している。この「神に生きる」ということをさらに広く理解するとき、人間が人間であるために、宗教的・文化的(包括的に言えば靈的)いとなみが不可避・不可欠であることを示唆している。J典における創造のテキストは、このような意味での人間の靈性の由来を語っていると言えよう。

創造論的な展開として、人間は「いのちの息の注入」によって「生きる者」となったということを第一とするとき、その次のこととしては、人間は「神

の像」に似せて創造されたということが重要な意味をもつ。ところで「神の像」という概念は、包括的であり、多方面に及ぶ解釈が可能である。その解釈の展望は、「神」ご自身が無限であられるゆえ、その「像」に似せて創造された人間も、神の無限の豊かさに呼応して、神学的人間論において、これからもさまざまに展開されていくことであろう。ただ、そのことを裏から言えば、「神の像とはこれこれである」と言うように、一義的に定義できるものでもなく、またすべきものでもなく、つねに人間的現実の経験とともにこの概念と対話していかねばならないものである。

たしかに、これまで「神の像」の理解をめぐっては、きわめて具象的に人間の四肢的形態は神ご自身がそうであるからだと理解されさえした。そのような極端な理解はともかく、人間が「神の像」であるということについては、神学史において、たとえば教父時代からスコラ神学にいたる伝統のなかで、原テキストの区別に従い、*imago (selem)* と *similitudo (demut)* とに区別され、前者を人間に与えられている理性、後者を聖霊によって人間のうちに創造される神の「似姿」であるとされた（もっともこの「似姿」というのも具体化を求める概念ではあるが）。宗教改革の神学においては、その福音理解の前提としての「墮落」の教理ゆえに、「神の像」を積極的に言及しえなかつたという事情がある。また「現代」では、「神の像」をめぐって、たとえばE. ブルンナーは、人間の、神と（隣）人とに対する責任応答性 ("Verantwortlichkeit") と理解し、K. バルトは「人間における神の像とは人間が男と女とに造られていることである」を言い、「それは神自身の中に起こる共同と共存の関係すなわち三位一体という原型的関係を模写し繰り返したもの」であるとされる（菅円吉、「神の像」、教文館版『キリスト教大事典』）。またG. エーベリンクは、「神の像」とは人間の「言語性」 ("Sprachlichkeit") と規定している。

このように見ていくとき、「神の像」とは、神と人間との関係、またそれを基盤とした人間と人間の関係、人格関係 (personal relationship) に限定されての理解であると思われるが、この概念はさらに広く、また深く神の宇宙・世界創造にも関連して理解する必要があるのではないか。つまり神は創造者であり、神の継続的創造のみ業も聖書に顕著であるとき——またそれに人間が心うたれるのも稀でないとき（たとえば詩篇 19:1, 8:3 など）、人間の

「神の似像性」も創造的御業の射程に応じて宇宙・世界的現実と関連して考えねばならないのではないか。また人間の（二次的）創造活動が創造者なる神の創造活動の反映であるとき、それは必ずしも狭義の、直接的な人格関係的領域のみに限定されず、文化的、芸術的、技術的など他方面に、創造における「神の似像性」を認めるができると思われる。実際、人間の有形・無形の「作品」は、そのような深さを示しているのである。このように考察を加えていくとき、人間の靈性は、神の「いのちの息の注入」による「神の似像性」をその内容とするものであり、それと同義であるとしうるのではないか。

#### IV. 精神の「垂直」次元と「水平」次元

創造論的な靈性理解、すなわち靈性を、人間のもっとも根源的な創造論的規定とすることが適切・妥当であり、かつ人間という現象が多様性・多次元性を明らかに示しているとすれば、その靈性の発現もそれに呼応して多様・多元的とすることは認められるであろう。いまそれを靈性の二つの方向としてとらえ、ひとつを「垂直」次元、もうひとつを「水平」次元として考えてみたい。

まず垂直次元であるが、むろん言わんとするのは、神ないしは超越者との関係においてという意味である。一般に靈性と言われるとき、重点はこの垂直次元に置かれる。神・超越者への憧憬、畏怖、神秘的・内面的経験、禁欲的服従など、人間の宗教性の核心をなす領域と言つてもよい。有名なF. シュライエルマッハーの「絶対依存の感情」などの論議は、まさにこの次元を言っている。そして人間が人間であることを確認し、人間が人間であることの深い自覚に到達するのはこの次元においてであると言わねばならない。R. オットーがその『聖なるもの』 ("Das Heilige") で述べた「恐ろしくも魅惑的な秘義」 (noumen tremendum et fascinosum) の経験こそ人間の内面の奥深さ、その靈性の深さの淵を指示している。それはすでに幾度か繰り返したアウグスティヌスの『告白』における言葉がそのことを、とりわけ、キリスト教信仰の範疇で言い表わしているとおりである（「[主よ、] なぜなら、あなたは

私たちをあなたに向けて [あなたのものとして] お造りになりました、ですから私たちの心はあなたの中に憩うまで安きを得ないので此—— "...quia fecisti nos ad te et inquietem est cor nostrum, donec requiescat in te"）。

しかし人間における靈性の発現——あるいは発露——は、狭義の神との人格的関係領域に限定されてはいない。それは、「水平」次元において、垂直次元と並行して展開される。人間は、必ずしも宗教的・信仰的次元においてのみ、人間であることの秘義を経験するのではない。むしろこの世界内において、直接的に、宗教的意識なしに靈性の発露を経験し、それに感動することも稀ではないからである（たとえば一つの「道」をきわめるべく打ち込んでいる姿）——もっとも、それを「宗教的」と形容することも可能であろうが。ところで靈性の水平次元は、垂直次元の直接の系として対人関係において見られるであろう。それは隣人への関りにおいてであり、人が隣人への深い関りを示すときに、そこに靈性を見、また靈性を語る。いや、人間の靈性の最も具体的な発露の形は、人間への深い関りにおいてであろう。N. ベルジャー エフは、「自分のパンのことは物質的な問題であるが、隣人のパンのことは靈的な問題である」（あるいはこの言葉の英訳のほうが原語のニュアンスを伝えているかも知れない—"Bread for myself is a material question; bread for my neighbour is a spiritual question"）と言ったと伝えられるが、そのような水平次元の靈性の発露を述べていると言えよう。

このような水平次元における対人的な靈性発露に加えて、私たちは靈性の「対物的」な発露も考慮に入れる必要はないであろうか。人間は、自らの周囲の物理的諸現象に接しても、言葉を紡ぎ、音を連ね、色を並べ、形を刻み、動きを磨き、思惟を集中し、仕組みを見極め、ものを生み出す。そしてそれらすべてにおいて人間の内奥の衝動の現れが見られる。人間の靈性は対物的にも発現し、その結実は、人間存在の奥深さを示す。たとえば音楽。それは物理現象としては、異なるヘルツ数の、異なる間隔をおいた、異なる強弱で響く、音のつながりである。しかし、そのような人間の心から生み出された音のつながりが、それこそ「心の琴線」に触れる内面的世界を経験させる。「靈性」という概念をより適切に理解するためには、そのような現象をも含めねばならないであろう。少し粗雑な論議となるが、このように考えていく

とき、人間のいとなみのすべてに深浅の違いはあっても、靈性の要素が分かれがたくあると考えねばならないであろう。というのも、靈性とは、深く創造論的で、靈性=人間性という等式が成り立つまでに人間にとって根源的なものであると理解するからである。

ところでこのような靈性の二つの次元の関係をどのように理解すべきであろうか。とりあえず結論的なことを言うならば、この二つの次元はともに神ご自身が「靈」であるということ（——そして人間はその神の靈によって「いのち」の息吹を吹き込まれている）と、神が創造者であること（それゆえに神の似像として創造された人間は神にならって二次的な意味で創造を喜びとする者）ということに由来する。そして、この二つの次元の発露は本来、一体的である。「神を喜ぶ」と創造世界を喜ぶことは、同時的であり、一体的であると言えよう。それは神の創造になる世界に、対象的世界に靈的な次元を認めることもある。そして靈性のこの二つの次元の調和的な発現こそ、人間であることの、神の創造によって与えられた祝福の実現となると考えられるのである。

またこのことを裏から言えば、垂直次元のみの靈性理解は、世界内における倫理的、「対物的」靈性をその理解対象の範疇から除外し、それを正当に評価することが不可能となる。また逆に垂直的次元を欠落させた靈性的発現は、その浅薄化につながり、ついにはその靈性的次元を失うことになるであろう（神を失った世界がいま靈性を求めているというのはこの事情を物語っている）。また他方、こう言うこともできようか——水平的靈性の発露もまた、本来的には垂直的靈性の変奏である、と。創造世界が与える深い感動の経験もまた人間に固有である靈性に深く関わるところであろう。そしてもしそうであるとすれば、それは人格的次元とは別の、あるいは非人格的な次元における靈性の経験と言うことも可能である。その意味で、創造論的に靈性を理解するとき、人間の内面のみならず、人間の内面を媒介とするであろうが、宇宙・世界における靈性の経験も包含できるように思われるのである。それは神のみわざの美しさについての感動であり、創造世界に見られる神ご自身の麗しさを喜ぶ喜びであり、あるいはもう一つ異なった意味での「神を喜ぶこと」（frutio Dei）につながると言えようか。

## V. 靈性と救済

靈性とは、すでに幾度か述べたように、人間の根源的な創造論的規定であり、それは垂直・水平両方向に発現するべく定められた内的エネルギーであるとすれば、神学的には、それは当然のことながら「墮罪」によってその原初の秩序は混乱しているとするのは当然である。そしてそれは現実において、いずれの方向・いずれの次元においても逸脱・混乱していることも予想される。

靈性の垂直方向における逸脱は、人間がおのれを神とするという「罪」のもっとも根源的な形において現れ、それは狂信（「カルト」）となる場合もある。また他の場合は、救済論的利己主義と呼ばれる方向にも行くであろう（「世捨て人」）。あるいは神秘主義、あるいは熱狂主義というような形態もあるであろう。他方、垂直方向を失った靈性は、端的に「偶像礼拝」にと行く。創造者によって存在へと呼び出されたとの自覚を失ったところにおいては、水平次元における靈性の発現の諸形態を究極とし、それらが「究極以前のもの」であるということ、つまり、ローマ書的に言うならば、「創造者のかわりに被造物を拝み……」（1:25）ということになるからである。人間は、自分の存在を意味あらしめ、それを充実させるために、その能力のゆるす限り、ときには過酷な禁欲・修練を自己に課してまでも、そのことを努める。それは権勢を求める事であり、富を求める事であり、芸術、スポーツ、冒險などで名誉を求める事であり、とさまざまに展開するであろう。一見、靈性との関りなしと見えるところにおいても、人間がさまざまに目標を定め、それを追求するとき、そこに靈性的側面がある。靈性は根源的な創造論的規定であるからこそ、人間は意味を求め、その実現に向わすにはおれずないのである。しかしその方向に根本的な狂いが生じるとき、靈性の発現もまた本来の定められた方向から悲劇的な逸脱にと向かう。人間が隣人を抹殺し、残虐に走り、その存在のあり方全体が恐るべきサタンの様相を帯びることも、人間が靈的存在、まさに靈性的存在であるからである。深い靈性を備え、そしてその豊潤な可能態が実現へと定められている人間の創造論的規定が、その

方向を見失うとき——人間をもっとも人間的にしている当のそのことが、悲惨な逸脱へとひきずりこむ契機ともなるのである。

人間は洋の東西・時の古今を問わず、その充実を求めて生きている。昨今、靈性論議が活発なのも、人間が自らのさまざまな可能性を試し尽くした結果、なおその求めるところを得ることができず（求めて赴いたけれども、求めていたものはそこになかった、それは蜃気楼にすぎなかったという経験）、眞實に人間が人間となることができるほどの道によるのか、という問い合わせである。靈性への求め、それは、人間が、今まで「外」を向いてきた結果、自己疎外に陥り、そしていま「内」にこそ本来の自己を求める手がかりがあると感じ始めている、現代的兆候ではないか。罪の赦しによる救いを語る福音は、神との関係の回復を告知する。それはとりもなおさず、創造の根源的規定である靈性の回復ということを意味する。それは、靈性が、人間の創造論的祝福の垂直方向・水平方向統合の結果として、全幅的な回復を得ることである。そのように考えていくとき靈性の回復は、狭義の信仰的領域に限定されず、人間の内面・外面の活動の全領域の回復ということであると理解される。このように、靈性を創造論的に捉えるとき、救済論における靈性の理解も、垂直的次元の靈性を核にしつつ、キリスト教信仰の「外」のさまざまなりアリティまで包括する広いものとなるであろう。「贖罪後」の靈性理解に広がりが与えられるということである。

## VI. 靈性の同心円的理解

これまで「靈性」を広義に捉えようと試みてきた。それは宣教論的な観点からも、（キリスト教信仰に限定されない）他の人間的精神活動を含め包括的に靈性を理解したいと願い、またそうすることが可能であるばかりか必要であると考えたからである。しかし、昨今の神学論議の関連で「靈性」が論じられるとき、キリスト教信仰固有の靈性に限定して論じられるのもしばしばであるように思われた。たしかに、その背後には、それなりの必然性があると考えねばならないであろう。それぞれの教派で、その伝統的神学・伝統的信仰告白にそって靈性をいかにとらえ、その深まりをどのように得ていくか

ということが論じられよう。諸教派において、それぞれの教派的伝統に従つた靈性の理解とそれの深まり、充実の方向が論じられ求められる。このような「狭義」の靈性理解は、具体的な諸教会の対内的靈性形成のためには必要であり、正当なものであると言わねばならない。あるいは、少しコンテキストを広げて、キリスト教界内の、より限定されたキリスト教的靈性の特徴というものを論議・探求することも必要であろう。そしてこの小論において、このように靈性を論じていること自体、すでにその文脈の中にある。そのようなときに前面にでてくるのは、やはり教派的伝統の確信に立った靈性論であろう。言わずもがなではあるが、本小論の論議は、筆者が立っているルター神学からのスケッチ的な靈性論の展開であった。そのようなことの中で、筆者が念頭において論じてきたことは、キリスト「教界」内における靈性論議が、閉鎖的に、「地域限定的に」("provincial")、「自分の庭だけで」の論議に終わらず、聖書的創造信仰を出発点に、広く開かれた靈性論を展開することであった。そしてそのような靈性論へのアプローチの端緒となったのは、これまでのキリスト教信仰固有の領域でなされている靈性論にたいして、もう一つの方向を示したいという願いであった。

小論で意図してきたのは、キリスト教信仰固有の靈性論でありながら、なおかつ「外」に開かれ、「外」の現実をも包括する靈性論を得ることであった。すでに指摘した事柄、つまり人間の營為はすべて靈的であり、靈性的要素をいつもその根底に秘めているというのは、ある意味で概念の極端な拡大化であって、靈性論議が焦点を失うとも言われるかも知れない。しかし、上述のように人間が、神——三一なる神——の像に創造された存在であるならば、その營為のすべてはその三一なる神と関連の中にあり、いつも靈的な次元をもっていると言わねばならないであろう。それは人間の生活のすべての面において、いわばその「ハレ」の面においても、また「ケ」の面においても、人間の生のいとなみは、靈的次元をのぞかせている。そのことを考えると、神学的な靈性論議においては、キリスト教信仰固有の領域にのみとどまる靈性論ではなく、むしろキリスト教信仰固有の靈性論でありつつ、「外」をも包括する靈性論でなければならないと考えるのである。とすると、それはどのような図式で考えるべきであろうか。

靈性論を廣義と狭義というように分けて考えることはこの関連では有益であろう。廣義の理解とは、創造世界における人間の營為のすべてを特徴づけているものとしての靈性理解である。狭義の靈性理解とは、より集中的に、昨今の靈性論議で優勢な贖罪論的な靈性の理解である。それはすでに述べた靈性の垂直次元と水平次元ともつながる。ただ、ここでは、人間における靈性の理解のもう一つの図式として同心円を考えている。狭義の靈性においては、被造物として神につながり（非キリスト教信仰においては当該の超越者につながり）、そしてそのような靈性的つながりが、人間のさまざまな「外的」いとなみにおいてその次元が現れてくるという理解である。そして、ここで言う核心的靈性が、正しく位置づけられてはじめて、その本来の方向にそった外延的発露が得られるということである。このような理解の中、私たちはキリスト教信仰固有の靈性論をもって、他の非キリスト教的靈性論（たとえば大拙的「日本の靈性論」）と、現実において真に「機能する」靈性論を求めての弁証学的な対話が可能になるように思われる。

### VIII. 結語にかえて

この小論において、靈性について、そのいくつかの面を検討してきた。人間は、いずれにせよ、その存在の秘義をそのいとなみにおいて示している。そのような人間存在は、内面・外面の、すべての面にわたってその深さを示している。私たちは、このような人間存在の秘義性を、その創造者なる神に由来するものと信じ、そこから人間を、その秘義性を、つまりその靈性を理解しようとしてきた。人間は単に、からだを脱ぎ捨てて神に合一するような意味での靈的存在でもなく、また人間が自律的に靈的であって、そのなすことが自動的に靈性を帯びているというのでもなく、靈性は神ご自身に由来し、それはまた創造世界においてもゆたかに展開する人間の創造論的祝福であると論じた。

そのような秘義的であり深い靈性の内実はなにかと言えば、それは愛という一語に尽きるように思われる。それは創造者にして贖い主、そして聖め主である三一なる神の愛の発露であり、その神に対する人間の応答としての愛

であり、隣人への愛であり、さらに被造物への愛ということになるであろう。そしてそのような生を、そして存在を与えられたことを感謝し、それを喜び、讃美して生きることこそ、靈性の現れであろう。そのように考えていくとき、靈性とは、その根源において神ご自身の似像に創造された創造の祝福と重なると言えよう。まさにこのような人間の全存在を祝福のうちに包括する靈性理解こそキリスト教信仰の弁証に大きく寄与すると期待される。

(神戸ルーテル神学校・校長)